

わが幼かりし日の玩具と遊び

酒井 恒

私は鎌倉に住んでいます。同じ屋敷内に二人の男の子の孫が住んでおり、別に同じ市内にやはり男の子の孫が二人おります。いちばん年上の孫が小学一年生、次が幼稚園、次の二人が来年から幼稚園という年頃です。毎土曜・日曜にはどちらかの孫と一緒に遊ぶことになっているので私にとって週末がとても楽しみです。

ところがこの孫たちの玩具がなんと一人当りだんぼーる箱二杯もあって、その種類も数えきれない程度です。宇宙戦艦大和をはじめとして、ウルトラマン、ラジコン、モンチッチ、ガッチャマン、あらゆる車種のミニカー等等。それらの玩具を次々に座敷中にひろげて遊ぶので、もうこの頃では孫たちとの遊びにはついていけなくなっていました。それ

にしても当今の子供たちは何とめぐまれていることかと玩具を見るたびに感じます。

*

私が孫たちと同じ年頃であったのは、遠い明治四十年頃でしたが、その頃私が親から買ってもらった玩具といったら、当時の相撲の両横綱の常陸山と梅

ヶ谷の瀬戸物で作った人形ぐらいしかなかつたと記憶しています。その人形は色で焼きつけてあつてもきれいでしたので小学校へいくようになっても手放さずに持っていました。それはその人形が習字の時間に墨をする時の水入れにもなっていたからです。その二つの人形以外には私の心の通った玩具は持っていなかったように思います。

しかしながら私たち田舎の子供の心をとらえていたのは買ってもらった玩具ではなく、四季を通じて展開する自然、つまり美しい野の花や昆虫や小川に

群れていた小魚たちであつたのです。そのような自然の遊び相手で私たちの毎日はずっとも楽しくて、たんぼで遊んでいて日が暮れる頃になると、どうしておてんとうさまが西に沈んで夜になってしまうのか残念でたまりませんでした。このような美しい自然の中で遊んでいれば、今の子供たちもきつと買ってもらった玩具以上に自然に対してよろこびと満足感を抱くようになるのではないかと思います。

私の郷土は神奈川県西域の足柄上郡、大井町で、小田原から北へ十キロ位のところです。昔は金田村といいましたが、村の西側を二宮尊徳で有名な酒匂川という清流が流れていて、その流域には広々とした、とても美しいたんぼが展開していて、四季を通じての自然環境はすばらしいものでした。今ではすっかり都市化してしまい赤や青の屋根が連なってしまう、何本かのパイパスも走っていて昔の自然のおもかげは見られなくなってしまいました。

冬が過ぎてたんぼの霜柱が消える頃になると鎮守

の森では赤いツバキが満開になりました。ヒヨドリ
の群が蜜を吸うために集まってきて鼻先を花粉で黄
色くそめて、楽しい叫び声を上げていましたが、私
たちが近よっても決して逃げはしませんでした。木
の下に一面に落ちていた花の中から形のいいものだ
けを拾って、ひもに通してすばらしいツバキの首飾
りをつくってみんなで首にかけて楽しみました。そ
れはハワイのブルメリアやアラマンダで作られた
「レイ」に少しも見劣りのしない美しい「レイ」で
したが、ハワイやタヒチの人たちが花の首飾りを楽
しんでいることなど田舎の子供たちは知る由もな
かったのですが、その着想は全く同じであったわけ
です。

三月のはじめから咲きはじめたレンゲソウは桜の
花の散る頃になると深紅の絨毯じゅうたんとなって田圃一面を
色どりしました。農家の人たちはレンゲソウとは呼ば
ないでモウセングサと呼んでいました。私たちもや
はりモンセンと呼んでいて、その毛氈もうせんの上に寝そべ
って、青空のヒバリの声をききながら、鳴き声を真
似ました。

今でもじっと目を閉じているとその頃のレンゲソ
ウの甘い花粉の香りと、蜜を吸いに集まってきたミ
ツバチの翅のひびきが頭の奥によみがえってきま
す。

レンゲソウの生えていない田の面には一面に「ス
ズメノテツポウ」がまるで種を播いたように生えて
いて、細い筆の先のような穂が出揃っていました。
農家の人たちはこの草を「ピーピグサ」と呼んでい
ました。そのピーピグサの先の方の一節をつみと
って、穂を抜きすてて、先端の一枚の葉を逆に根元
に向けて曲げ、唇にはさんで吹くと調子の高い草笛

になります。この草笛は誰が吹いても、どの茎をとっても、笛の音色は同じピーピーでした。

同じような草笛はタンポポの茎でも麦の穂の茎でもつくりました。タンポポの花茎を四センチ位に切りとって、根元の方を口にくわえて、前歯と舌の先で数回軽く咬むともう立派な笛が出来上ります。麦の穂を一本抜きとって、その軟かい茎の部分をやはり四センチ位の長さに切って根元の方をくわえて、歯と舌の先で軽く数回咬みます。これもよく鳴る笛ができ上ります。タンポポや麦の穂からつくった笛は太さと長さをいろいろに変えると笛の音色や調子がさまざまに変わることを私たちは知っていました。そうして、いろいろな笛でリズムをつくりながらの子供吹奏楽団をつくったことも楽しい思い出となっています。

*

酒匂川の土手には老松もありましたが小松も洪水を防ぐためにたくさん植えてありました。松の木は葉が痛くて木登りなどできませんでしたが、それでも松葉や松の新芽を使つての遊びはいろいろ工夫されていきました。小松の枝を注意して眺めていると一枝に何本かの松葉が、どうしたことか先が釣針のように曲つています。そのような曲り松葉を探し集めて数を競い合いましたが、それを使つていろいろな作品をつくることもまた楽しい遊びでした。釣針のように曲つた部分をひっかけ合わせて長い鎖もつくりました。農家の熊手をまねて曲り松葉の熊手もつくりましたが、これなどは今考えると正に幼児制作の民芸品といった価値があったように思っています。

四月の終り頃になると松の新芽が長くのびてきます。この新芽のことを松のみどりと呼びますが、その先端にきれいな紫色の雌花が数個ずつついていきます。これが成長すると「まつぼっくり」になるとい

う私たちの観察は正しいものでありました。その小さい雌花は夏の終り頃にはもうかなり大きい緑色の固い松の果実に成長し、それが翌年の秋には実を散らして「まつぼっくり」になって落ちることも承知してしました。

松のみどり、を折ると透明のねばり強い松脂ヤニがあふれ出ます。その松脂は私たちのつくる笹舟の動力源となりました。笹舟は「マダケ」の葉は小さいので、笹竹の大きい葉でつくりました。笹の葉を前端と後端を折り返して手際よく舟をつくり上げ、その舟尾に松脂をぬります。そうして池の面に浮べると笹舟は、松脂が水にとけてひろがる反動で走り出します。笹舟がいかにまっすぐに、滑かに池の面を走っていくかは舟尾につける松脂のつけ方によるもので、そのつけ方は子供心にもいろいろと工夫をこらしたものです。

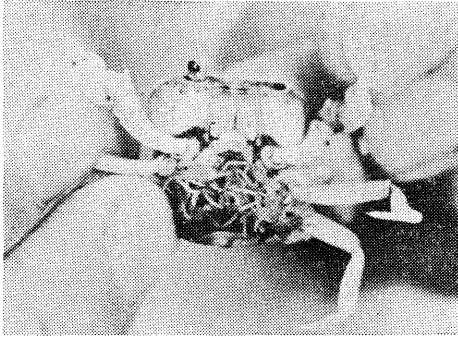
*

酒匂川という川は平素は清い河原にすんだ水が流れていて、四季を通じて今日でもゆらゆらと陽炎かげろうが立ちのぼっています。一旦暴風雨が襲ってくると忽ちにして濁流がさかまき、そのために昔から何度も堤防が決壊してたんぼを荒廃させました。その荒廃が対岸の桜井村（現在は小田原市）では二宮尊徳を生み、私の村にも洪水の残物として土砂の山や、大小の水たまりやそれらを結ぶ溝や小川が残されました。これらの水域には他に例を見ない程に豊富な淡水魚やエビ、カニなどを産するようになりました。ですから水ぬるむ頃から夏にかけての私たちの魅力はたんぼへいって、こうした水の動物たちと遊ぶことでありました。

私たちはいろいろな魚の名前を知っていました。が、名前ばかりでなくその生息状態をも経験にもとづいて覚えていました。フナやドジョウは水の暖かい所でないといないし、ハヤやモロコは流れの早い

水の冷たい所でないといないことなども知っていました。

そして私にとっては生涯かけての研究テーマとなつたカニともこのたんぼで最初に触れ合うようになりしました。このたんぼにいたのはサワガニと形の



夏の終りになるとサワガニのめすは、
たくさんの子ガニを抱いていました。

大きいモクズガニの二種類でしたが、いつもかわいがって飼っていたのは、赤や青や白など色の変異に富んでいたサワガニでした。モクズガニは大きくてはさみに毛が生えていて恐ろしいので、触れることはありませんでした。サワガニを飼っておいで特に興味を感じていたのは、餌をたべる時に両方のはさみを器用に使って、私共と同じように行儀よく食事することでした。海岸へ行ったこともなく、海から遠く離れた田舎に住んでいた私は海のカニなどは一度も見たことはありませんでした。

(一九七九・三・五)